

# 内モンゴルの家畜飼育道具から見る農牧複合 牧畜民の物質文化と生業の変化

著者	フフアグラ（青山）
雑誌名	東北アジア研究
巻	22
ページ	79-110
発行年	2018-02-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00122380">http://hdl.handle.net/10097/00122380</a>

## 《資料・研究動向》

# 内モンゴルの家畜飼育道具から見る農牧複合 ——牧畜民の物質文化と生業の変化

フフアグラ(青山)\*

A study of mixed farming from livestock farming tools of Inner Mongolia:  
herdsman's material culture and subsistence changes

QINGSHAN

### 要旨

本稿は、中国内モンゴル自治区ホルチン左翼後旗における事例調査を基に、モンゴル人の家畜飼育用道具—「オンゴチャ」について着目し、ホルチン・モンゴル人の物質文化の変容における農業と牧畜業の関わりを人類学的方法で明らかにするものである。まず、梅棹忠夫調査におけるオンゴチャを提示し、従来の内モンゴル牧畜研究を検討し、モンゴル牧畜研究における位置づけを検討した。その上に、ホルチン・モンゴル人の生活する社会背景と農牧生業の営みについて紹介した。そして、オンゴチャというのはどんなものであるのか、オンゴチャを分類し、オンゴチャの利用とその広がり諸要因を探った。それから、各家畜における利用状況、オンゴチャの多様化及び注文、購入などについて記述した。牧畜民が農業と牧畜を共にし、農業という植物に働きかけて食糧を確保する生業を利用する中で、人間の食料だけに留まらず、家畜の飼料を確保することにより、生活の基盤を確保していることを明らかにした。

キーワード : 内モンゴル、ホルチン・モンゴル人、牧畜民、農牧複合、家畜飼育道具

Keywords : Inner Mongolia, horqin Mongolian, herdsman, mixed farming, livestock farming tools

### 目次

1. はじめに
2. 研究方法と調査地
  - 2.1 研究方法
  - 2.2 ホルチン・モンゴル人
3. ホルチン・モンゴル人の農牧生業
  - 3.1 家畜飼育
  - 3.2 農業
4. オンゴチャ(onggca)とは何か

---

\* 東北大学大学院環境科学研究科博士後期課程

- 4.1 語義と分類
- 4.2 オンゴチャの利用拡大
- 4.3 オンゴチャの利用
  - 4.3.1. 馬のオンゴチャ
  - 4.3.2. 牛のオンゴチャ
  - 4.3.3. 羊・山羊のオンゴチャ
  - 4.3.4. 豚のオンゴチャ
- 5. 多様化するオンゴチャ
  - 5.1. 材質、形、利便性
  - 5.2. 注文、要望
- 6. おわりに

## 1. はじめに

本稿は、内モンゴルのホルチン（注1）地域のモンゴル人の家畜飼育用の道具にあたる桶—「オンゴチャ」(ongguca) に着目し、牧畜民の物質文化の変容を通じて牧畜と農業の関わりを人類学的方法で明らかにすることを目的とするものである。

上述のオンゴチャについて、梅棹氏はその内モンゴルにおける牧畜調査において、家畜に水を飲ませるには井戸がある【図1】、井戸は草原とともに全モンゴル人の共有財産である、井戸の周りには、家畜に水をやるための桶オンゴチャが置かれている〔梅棹 1990:592〕と牧畜の中でオンゴチャが使われていることに言及されている。

従来、モンゴル人といえばチンギス・ハーンまたは遊牧民というイメージであった〔小長谷 1997:7〕。そして彼らは遊牧民として、家畜という動物とかかわりながら、生活の基盤を確立していると想定されてきた〔小長谷 1992:8〕。すなわち水と草を求めて放牧地を季節的に移動する生活を営む牧畜民というのが典型的なモンゴル人イメージである。しかし、そのモンゴル人の一部であるホルチンのモンゴル人たちは、伝統的な遊牧生活からかけ離れ、家畜飼育と農業を共にした生業に従事するようになっていく。その牧畜と農耕を共にしている生業を農牧と呼ぶ〔福井 1987:15〕。また、福井氏は、放牧地を共有している家畜飼育を牧畜として論じた〔福井

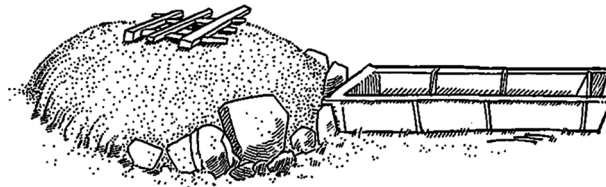


図 57

【図1】 梅棹の画いた井戸とオンゴチャ〔梅棹 1990:592〕

1987:14]。

上述した福井の論理に基づけば、ホルチン・モンゴル人は清末から定住し、一定の場所で牧畜と農耕を共にに行っているために、生業様式としては「農牧」を行っている牧畜民である。

本稿は、牧畜民の物質文化と生業に焦点を当てたものになる。まず、従来の内モンゴル牧畜研究はどのようなアプローチで展開してきたかを概観してみよう。

近年内モンゴルの社会変容および環境破壊に関する研究は盛んに行われており、その中で漢族の入植と開墾と遊牧社会の変化に関する研究が注目される。サイン氏は、内モンゴルの多くの地域において現地調査を行い、モンゴル民族の遊牧からの定住化および牧畜から農耕へ生業転換した過程を明らかにした [色音 1998]。彼は社会発展論的な観点に基づき、漢族の入植及び開墾がモンゴル遊牧社会の経済発展に欠かせない役割を果たしたと論じている。ボルジギン・ブレンサイン氏は、歴史的な立場から東部内モンゴルにおける蒙地開墾と漢族入植により農耕化され、村落社会を形成し、生業として農業と牧畜が共存していることを明らかにした [ボルジギン・ブレンサイン 2003]。しかし、彼は農業と牧畜の相互関係について明らかにしてない。小長谷氏は、内モンゴルのシリングル盟を事例にし、定住や放牧地などの分配により牧畜民の牧畜経営は多業化していることを明らかにした [小長谷 2001a]。郝亜明氏と包智明氏は、内モンゴル・ホルチン左翼後旗にて、現在の農耕モンゴル村落社会における人口問題や婚姻・家庭問題、消費構造などの実態を把握するとともに、現在実施されている国家政策の影響について解明した [郝亜明・包智明 2010]。児玉氏の研究は内モンゴル・オルドス地域の「農牧民」の現代の変容について畜類型と資源利用に着目しながら、干ばつ進行と定住化により牧畜から放牧畜産に転換、さらに、環境政策により「舍飼い畜産」へと変化したことを解明した [児玉 2012:109]。

これまでの内モンゴルにおける牧畜研究を概観してみると、モンゴル牧畜民の生活様式や生業転換、環境破壊や開発資源利用などが明らかにされてきた。しかし、内モンゴルにおけるホルチン・モンゴル人の農業と牧畜の相互依存関係については明らかにされてない。また、農業と牧畜業の相互関係からモンゴル牧畜の変化を解明した研究はほとんど見られない。特に、家畜飼育における道具から家畜飼育の変容を明らかにした研究は皆無に近い。

以上の研究を踏まえて本稿では、ホルチン・モンゴル人がいかに農業を利用して牧畜を維持しているのか、社会主義的な市場経済化に直面している牧畜民の「農牧」という生業は如何に自然・社会環境の変化に応じて実践されているのかという問題意識を持ち、人々の農業と牧畜を共にに行っている生業における農業と牧畜の相互依存関係を家畜飼育用の道具にあたる桶—「オングチャ」(ongguca) の利用と変化を通じて分析し、モンゴル牧畜研究に新たな資料と視点を提供することを試みたい。



## 2. 研究方法と調査地

### 2.1. 研究方法

本研究においては、文化人類学的なフィールドワークによって、調査地の人々の家畜飼育における道具であるオンゴチャに注目した。オンゴチャについて、直接観察、参与観察非構造化面談による聞き取り（2014年、2015年）とインタビュー（2016年、2017年）を行い、牧畜民の農牧生業における相互依存関係を理解することを重視した。

また、本稿では、文字資料も利用する。その文字資料は主として調査地域の政府の公文書などである。これらに基づいて調査地の家畜数の変容、土地資源の利用状況を把握した。

本論文に記述するデータは、2012年2月の3日間の調査に入手した一部の文字資料からなる統計データと2014年1月20日から3月2日まで42日間、断続的にフィールドワークによる聞き取り資料や撮影した写真、文字資料からなる統計データ、2015年7月26日から8月23日まで29日間、博士論文の予備調査として農作業に関するフィールドデータ、2016年4月27日から2016年6月28日まで63日間、人々の農業の営みと禁牧政策への対応などを中心調査したデータ、2017年2月9日から2017年3月23日までの43日にわたるオンゴチャの利用に関するフィールドデータ、合計180日間のデータからなる。

このように、研究方法としては従来の牧畜に関する先行研究と、フィールドワークで得たデータを結合して分析する。事例におけるインフォーマントの氏名と村名は、プライバシー保護のため仮名にして表記する。

### 2.2. ホルチン・モンゴル人

内モンゴルのホルチン・モンゴル人たちは、1949年の中華人民共和国成立以来、激しい社会環境の変化を経験してきた。1958年に人民公社が設立されたが、1980年代の改革開放により人民公社が解散し、生産責任制が導入され、1982年には正式に家畜の私有化と土地の分配が実施された[郝・包 2010:82]。生産責任制の導入によって1990年代には、内モンゴル自治区全体の家畜飼育頭数や農耕地が増加する一方、砂漠化の進行は深刻さを増した。中国政府は「西部大開発」というプロジェクトを行いつつも、破壊された生態系の回復や破壊を未然に防ぐため2002年に「退耕還林・退牧還草」の政策を実施した[淡野 2011:53]。この政策に従って、内モンゴル東部地域では家畜の放牧を禁止し、家畜の舎飼いを推進した。

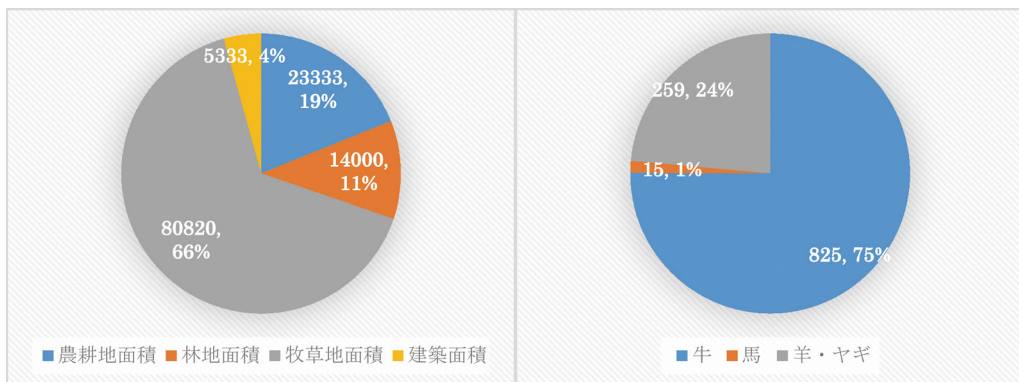
このように大きな変化に直面してきた内モンゴル・ホルチン地域のモンゴル人は、現在、砂漠化や放牧地の縮小、採草地の消失などのため、家畜の飼料として主に作物を利用するようになった。また、環境回復のための「退耕還林・退牧還草」の政策により、放牧が季節的に禁止され、家畜を舎飼いすることが季節的に行われている。

本稿では、中国内モンゴル自治区通遼市ホルチン左翼後旗のモンゴル人集団居住地であるEB村（注2）【図2】の牧畜民を事例とする。

ホルチン左翼後旗は内モンゴルの東南部に位置し、面積は 11535km<sup>2</sup>、海拔 200–500 m の台地が広がるホルチン砂漠地域の一部であり、固定砂丘や半固定砂丘、それらに囲まれた平地の草原などからなる。大陸性気候であり、年平均降水量は 358–483 mm [科爾沁左翼後旗誌 1993: 131–133] である。〈ホルチン黄牛の里〉という美称があり、1 世帯に平均 2 頭の牛が飼育されている。ホルチン左翼後旗の人口は 40.1 万人（モンゴル族は 73.9% を占める 2007 年）である [科爾沁左翼後旗誌 1989–2007 年編纂委員会:12]。EB 村は、ホルチン左翼後旗の北西部に位置し、ソム所在地から北東に 1 km 離れている。2017 年の調査では、村に実際に暮らしている人口は 183 人（漢族 2）、57 世帯（漢族 1 世帯）、そのうちに 5 世帯は家畜を飼育していない。村の面積は



【図 2】 EB 村の地理的位置(1:50 km) [内モンゴル自治区地図 1999 により作成]



【図 3】 EB 村土地利用面積の割合と家畜飼育頭数の割合 [調査により作成]

約 160,000a、家畜総数 1,099 頭であり、それらの内訳は【図 3】である。養豚についても、自家消費のために基本的に 1 世帯 1 年に 1 頭の豚を春から飼育し、冬に殺して食べる形で飼育している。

3. ホルチン・モンゴル人の農牧生業

3.1. 家畜飼育

モンゴル人が飼育してきた主な家畜とは、羊、山羊、牛、馬、ラクダである。これらの五畜の総称をモンゴル語でマル（mal）とよぶ。しかし、ホルチン地域ではマルと言えば牛だけを指す。

EB 村の人々は、主に牛と羊を飼育している。牛の数が圧倒的に多く全家畜の 75%を占め、羊は 24%程度である。平均すると一人あたり牛 4.5 頭、羊と山羊を合わせて 2 頭にも満たない。この地域では家畜として主に牛を飼育しているために、五畜を指すマル（mal）が牛だけを指すようになったと考えられ、この地域の家畜飼育における一つの特徴であると言える。家畜飼育は【表 1】に示したように放牧と舎飼いを結合した飼育方法をとっている。

家畜の飼料としては、夏の時期は牧草地に生える草を与え、冬期は草刈で得た乾草を与えるのが一般的である。しかし、EB 村においては、草刈りをほぼしないため、冬期は家畜にトウモロコシの茎或いはトウモロコシのサイレージを食べさせる。また、家畜全般にトウモロコシの実を食べさせ、牛や羊・山羊には専用の化学配合飼料も食べさせる。

【表 1】 家畜の季節ごとの飼育方法 [2014 年の調査より作成]

季節	月	時期	オスウシ	メスウシ	羊・ヤギ	ウマ
春	3	放牧禁止期	舎飼			
	4					
	5					
夏	6	放牧期	舎飼・放牧	放牧		
	7					
	8					
秋	9					
	10					
	11					
冬	12		舎飼	舎飼・放牧		
	1					
	2					

### 3.2. 農業

清末民初の時期に遊牧モンゴル人の一部は定住し、内モンゴル地域の開墾によりモンゴル人の生業に変容が起こった。その結果、ホルチン地域ではモンゴル人も積極的に農耕を行うようになり、農業の技術が進歩し、蕎麦とキビに加え、さまざまな作物を栽培するようになった〔サイン 1998:214-215〕。

哲里木盟（通遼市）志によると、1949 年以前には肥料を使わず、灌漑もなく天水を利用する粗放的農業を行い、1950 年代から 1970 年代かけて、土壌改良、河川灌漑、化学肥料の使用などが開始した〔哲里木盟地方志編纂委員会 1996:23-24〕。1960 年代末はホルチン砂漠地域の農耕増加の第一のピークだった。〔黄健英 2009:143〕。1980 年代からは、本格的に化学的肥料、農薬、農用機械、交雑種子などが利用され、トウモロコシの栽培が拡大された〔哲里木盟地方志編纂委員会 1996:25〕。

現在、農耕において、人力や家畜の力を用いることはほとんどみられない、主にトラクターなどの機械を利用し、作物として生産性高いトウモロコシを中心に栽培するようになっている。トウモロコシは、茎を家畜の飼料にする、実を粉にして家畜の飼料にする、茎や実の軸棒を燃料として燃やすなどの多様な利用方法がある。

EB 村において、地下水を用いた灌漑が利用されているが、降水量が少ない年は農業の生産性が半分ほどに落ちることがある。なぜなら、地下水の灌漑は天水のように効果はなく、その上、一回の灌漑に使う労働力や軽油代などの支出が高いために容易におこなうことはなく、天水を待つことが多いのである。

ホルチン・モンゴル人は砂丘のような場所を農耕地として利用する場合が多く、一人当たりの農耕地は 53 a である。1 a にトウモロコシを栽培すると、年間 60-70 kg 収穫できる。トウモロコシの実を 1 kg あたり 1.2 元（2016 年の価格）と計算すれば、53 a から 4,452 元（約 7 万円）の収入を得ることになる。

EB 村において、2017 年には牛一頭は約 8,500 元（約 14 万円）で取引されるため、牛一頭の収入は約 100a のトウモロコシの収入と等しい。以上から、牛飼育から得られる収入は農業収入を上回ることが分かる。

しかし、本調査地において、トウモロコシ栽培がおこなわれているのは、単に生産性が高いためではなく、家畜の主たる飼料としてトウモロコシの茎や実を得るためである。これは当地域の農業における特徴である。

## 4. オンゴチャ(ongguca)とは何か

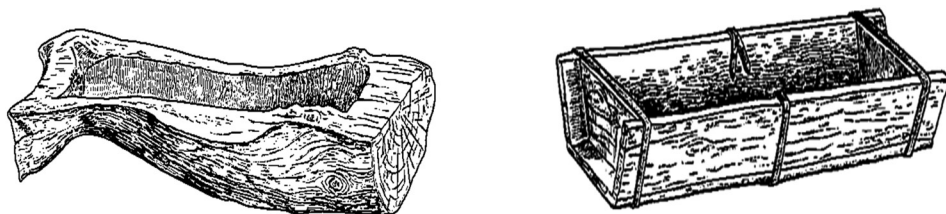
### 4.1. 語義と分類

梅棹忠夫氏は1944年9月から1945年2月までの内モンゴルにおけるモンゴル牧畜調査で、家畜に水をやる桶をオンゴチャ〔梅棹1990:592〕と呼んでいると指摘し、モンゴル人の大工「ムージャン」の作る箱型容器を舟〔梅棹1990:596-597〕と言うと指摘している。日本語の舟は、水・酒などを盛る箱型の器〔新村編 広辞苑1982:1957〕を表す表現があるために、箱型容器も「オンゴチャ」と呼ばれていたと推測できる。

そのオンゴチャ(ongguca)のモンゴル語における意味は、鉄や木製の人や動物を載せて海や川を移動するものを指す。また、木や石で作った家畜に水やるために井戸のところ置くものをオンゴチャと言う〔二十八卷本辞書1988:332〕。また、体を洗うために入り込む器具や物を差し込むための細長い器具、家畜に飼料と水を与える器具などを指す〔R・ツェベル編 簡明モンゴル語辞典1966:476〕。日本語で訳した場合は、水飼い場の丸太をくりぬいた水桶、まぐさおけ、飼い葉おけ、槽、浴槽、ボート、小舟、船、飛行機器具や物を差し込むための細長い器具とされる〔現代モンゴル語辞典(改定増補版)1994:328〕。モンゴル語のonggucaを中国語では、「船」あるいは「槽」と言う〔蒙漢辞典1999:192〕。

本稿で表現するオンゴチャの意味は家畜に水と飼料を与える道具に当たり、特に、家畜に飼料を与えるオンゴチャについて議論をする。現在、内モンゴルでは家畜に水を与えるオンゴチャに比べ、飼料を与えるオンゴチャが圧倒的に多く使われている。また、梅棹(1990)では、井戸は共有の財産と論じていた。そして、【図4】のように、丸太をくりぬいたものは、外径35×150cm、内径22×110cmであり、板を組み合わせた鉄製のタガをはめたものがある〔梅棹1990:592〕と述べている。

しかし、現在内モンゴルにおいて、井戸はほぼ個人的なものになっているために、オンゴチャも共有から私有になっている。その上、モンゴル人の利用しているオンゴチャは、木製だけに留まらず、鉄製、レンガ・コンクリート製、ゴム製、石製などの多様なもので作るようになり、形も【写真1、2】に示したように多様になった。そのために、オンゴチャの前に何用のオンゴチャと説明をつけて分別する。たとえば、家畜に水やるオンゴチャを「水のオンゴチャ」と言い、牛に飼料を与えるオンゴチャを「牛のオンゴチャ」というように分別する。



【図4】 梅棹の画いたオンゴチャ〔梅棹忠夫1990:593〕



オンゴチャは、木製、鉄製、コンクリート製などの様々な材質で作られる。ホルチン・モンゴル人はオンゴチャをその性能や利便性により使い分ける。木製のオンゴチャは作り易いが、壊れ易い。さらに、水を入れると漏れる恐れがあるため、主に飼料を与えるオンゴチャとして利用する場合が多い。鉄製のオンゴチャは水の漏れを防止し、また腐りにくいという特質をもつため家畜に水を与えるオンゴチャとして利用する場合が多くみられる。もちろん、飼料を与えるオンゴチャとして利用する場合もある。しかし、大型の家畜は鉄製のオンゴチャではケガをする恐れがあるために、レンガ・コンクリート製のオンゴチャが望ましい。レンガ・コンクリート製のオンゴチャは水にも飼料にも利用できる。家畜の舎飼いに伴い、畜舎の中にレンガ・コンクリート製のオンゴチャを作って、水と飼料兼用のものとして利用するようになっている。

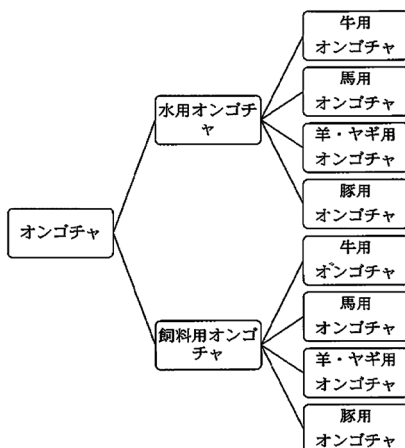
上述のことを踏まえてオンゴチャを分類すると、【図 5】に示したように、オンゴチャの用途に応じて水用のオンゴチャと飼料用のオンゴチャとの大きく二つに分類することができる。そし



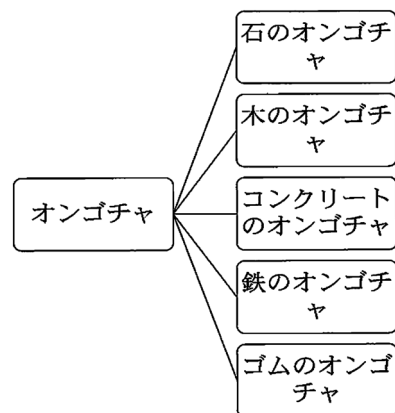
【写真 1】 家畜に水やるオンゴチャ



【写真 2】 家畜に飼料やるオンゴチャ



【図 5】 用途に応じたオンゴチャの分類



【図 6】 作成材料に応じたオンゴチャの分類

て、水用のオンゴチャをどんなの家畜用であるかに応じて牛のオンゴチャ、馬のオンゴチャなどと分類する。同じように、飼料用のオンゴチャも牛のオンゴチャ、馬のオンゴチャなどと分類する。さらに、【図6】に示したように、オンゴチャの作成材質に応じて、木製、鉄製、コンクリート製、ゴム製などと分類することも出来る。

2017年2月の時点で、EB村における人々のオンゴチャの利用総数は554個であり、その内に壊れた物は35個あり、平均1世帯約10個ある。その内訳は、【図7】に示した通りである。

ここで説明しておきたいのは、上述の通りEB村には52世帯が家畜飼育しているが、その52世帯は基本的に1世帯に牛舎1棟あり、その中に二列の長いレンガ・コンクリート製のオンゴチャが設置されている。

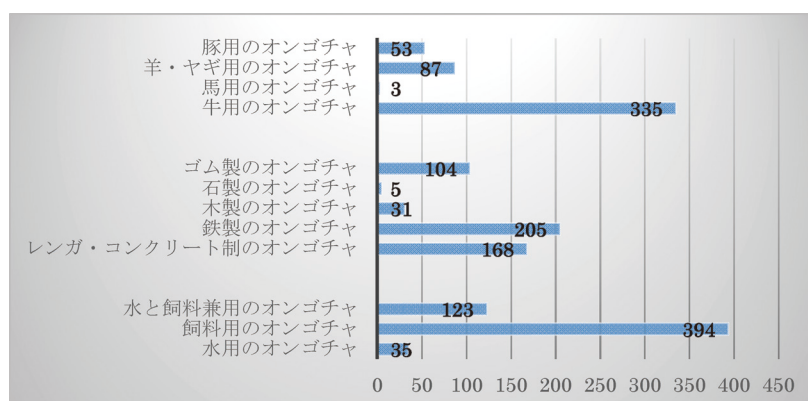
## 4.2. オンゴチャの利用拡大

これまでは、家畜に水と飼料を与える道具「オンゴチャ」の語義と分類について述べてきた。ここからは、オンゴチャの利用とその拡大について分析したい。

家畜に水をやるためにはオンゴチャを使うことが当然だとして考えられる。しかし、飼料用のオンゴチャは違う存在である。遊牧的な飼育を行う場合は、家畜は四季に応じて移動し、自然に生えている草あるいは植物を食べる。従って、飼料を与えるオンゴチャを利用しない。定住して日帰り放牧を行っている家畜飼育型でも、採草地があり、家畜に越冬できる干草を刈れるならば、夏には草原に生えている草を食べさせ、冬には秋の草刈りで保存させた干草を食べさせるのでオンゴチャを利用しなくても済む。

しかし、ホルチン・モンゴル人は家畜飼育には、上述したように飼料を与えるオンゴチャの利用が圧倒的に多く。ここでなぜホルチン・モンゴル人は家畜飼育には飼料用のオンゴチャを利用するようになったかという問題が浮かび上がる。

従来の家畜に飼料を与えるオンゴチャの利用について歴史資料を調べると、古代中国の春秋戦



【図7】 オンゴチャの利用状況 [調査により作成]

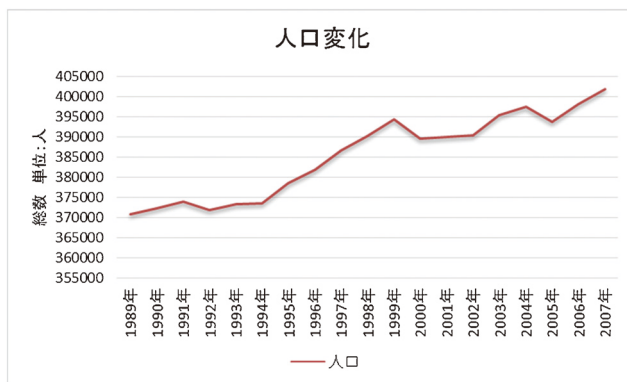
国時代（注3）に書かれた『相馬経』には、父馬を飼って喧嘩させない法—多くの父馬を飼っている家には、別に1坊を作って、そこに槽・厩をたくさん設け、切り芻(まぐさ)と穀豆とを各馬別々に置く〔千田 訳 謝 著 1977:44〕と論じている。また、北宋時代（注4）に『蕃牧纂驗方』の馬匹編には、毎日、麩(ふすま)と草料を8文宛与え、飼槽につかせ給食する〔千田 訳 謝 著 1977:44〕と記されている。そして、元代に書かれた『東魯王氏農書』の養牛編には、初春の時期に、牛には細く刻んだ藁(こう)、ふすま、穀豆などを水に加え、槽に入れて給食する〔繚 訳 注 王 著 1994:65〕と書かれている。

それから、古代中国の北方乾燥地域（注5）の労働者たちは農牧結合生業には何千年に渡る経験を重ねて来た〔中国農業遺産研究室 1986:229〕。特に、漢・唐時代に、北部農区の人々は農業と牧畜を結合した生業を営み、経済的に栄えた〔中国農業遺産研究室 1986:251〕こともあった。

上述のことから、中国北部の人々は農牧を結合した生業を営みながら、飼料用のオンゴチャというものを紀元前から家畜に細く刻んだ草や作物を与えるために使ってきたことは明らかである。

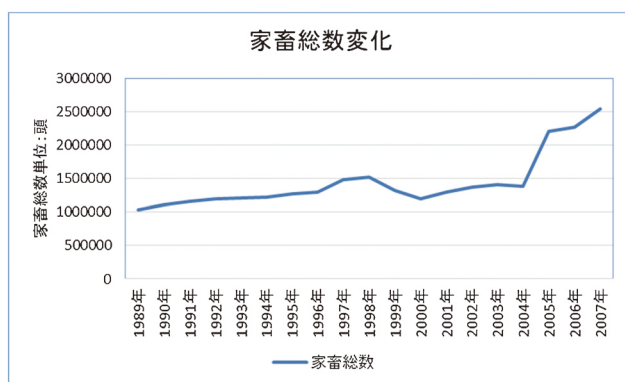
内モンゴル・ホルチン地域には、清朝の中頃から激しい蒙地開墾によると急激な農耕化にさらされてきた。蒙地開墾によって漢人農民が殺到し、それに伴って牧地の狭域化現象が生じた〔ボルジギン・ブレンサイン 2003:2〕。また、ホルチンの牧畜民は、清末民初の時期の蒙地開墾により遊牧生活様式を放棄、定住しながら農業を行うようになった人々である〔サイン 1998:113〕。これらのホルチン・モンゴル人は漢族の入植により農耕化にされ、漢族との接触により農耕技術や家畜飼育技術など受け入れるようになったと考えられている。さらに、モンゴル族の家畜飼育に飼料用のオンゴチャが利用されたのは中国北方の漢族との接触から伝わったことが推測される。

そして、ホルチン地域は90年代から人口、家畜、農耕地などが増加、砂漠化、牧草地が減少するなどの社会現象が生じた。ホルチン左翼後旗の1989年から2007年までの統計データ【図8、9、10】に示した通り、この18年間に人口は30,000人が増加し、家畜の頭数は100万頭から約1.5

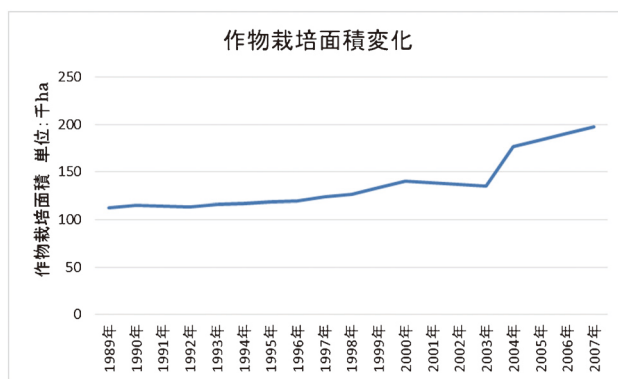


【図8】 ホルチン左翼後旗の人口変化統計図  
〔ホルチン左翼後旗誌 1989～2007 年により作成〕





【図 9】 ホルチン左翼後旗の家畜総数変化統計図  
[ホルチン左翼後旗誌 1989～2007 年により作成]

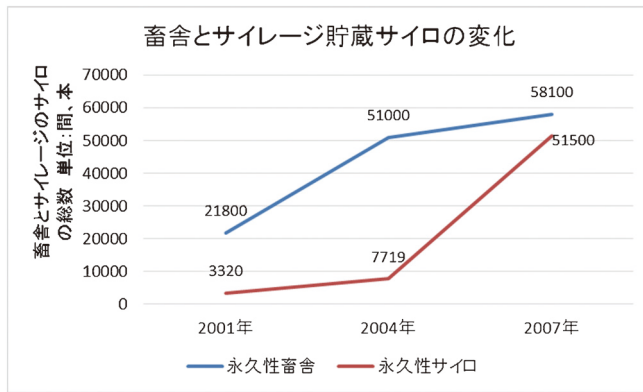


【図 10】 ホルチン左翼後旗の作物栽培面積変化の統計図  
[ホルチン左翼後旗誌 1989～2007 年により作成]

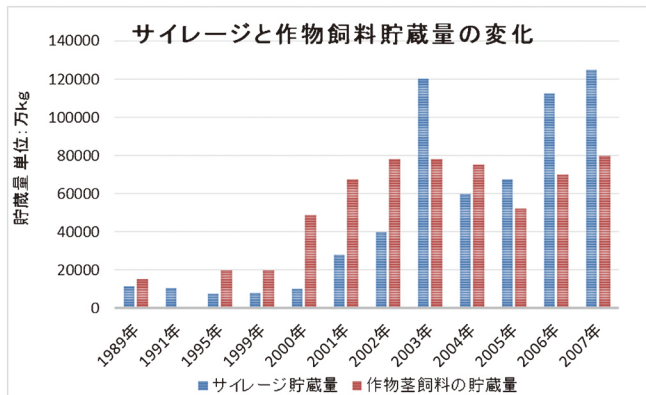
倍増加した。その上に、農作物の栽培面積はおよそ 2 倍までに拡大した。

上述のホルチン左翼後旗に起こった人口や家畜の増加、農耕地の面積の拡大により、牧草地に対して過放牧になり、砂漠化を起こす要因となった。また、砂漠化と農耕地面積の拡大により牧草地が減少した。ホルチン地域の砂漠化や環境破壊に対して、中国政府はから 2002 年に「退耕還林・退牧還草」の政策を実施し、それに伴いホルチン地域において、家畜の放牧は季節的に禁止されるようになり、その政策により家畜の舎飼いが促進された。

ホルチン左翼後旗は、2002 年 12 月から放牧禁止を実施し、舎飼いを実践した [科爾沁左翼後旗誌 1989～2007 年編纂委員会 2008:215]。それは畜舎やサイレージや飼料貯蔵のサイロの建設を促した。その時期の畜舎やサイレージ貯蔵用のサイロ建設の統計から見れば、【図 11】に示した通り、畜舎の建設は 2 倍まで増加し、サイロの建設は 10 倍まで増加した。上述したように牛舎の中にオンゴチャを設置するとすれば、畜舎の建設に合わせてオンゴチャの建設も増加することになる。また、家畜の舎飼いは家畜飼料の需要を大幅に増加させた。そのため、牧草地が縮小し、



【図 11】 ホルチン左翼後旗の畜舎と飼料用サイロの建設統計図  
[ホルチン左翼後旗誌 1989～2007 年により作成]



【図 12】 ホルチン左翼後旗のサイレージと作物飼料貯蔵統計図  
[ホルチン左翼後旗誌 1989～2007 年により作成]

農耕地がふえたホルチン地域では、作物を用いた飼料の重要性が高まり、その割合が増加した。ホルチン左翼後旗の家畜用作物飼料の変化は【図 12】に示したように、舎飼いが起こった 2003 年に作物飼料貯蔵量は第一のピークだったが、それから、2007 年に再びピークとなった。この家畜飼料にするサイレージや作物の貯蔵量の増加からホルチン・モンゴル人の家畜飼料における作物の割合が 2003 年から激的に増加したことが分かる。

上述のように、ホルチン・モンゴル人は、人口、家畜増加や農耕地拡大などによる砂漠化や放牧地の縮小などの社会現象を経験しながら家畜の飼料として主に作物を利用するようになった。そして、家畜の舎飼いは飼料の需要を大幅に増やした。そのため、作物からなる飼料の重要性が高まった。その際、家畜は作物の茎などを干草のように残さずに食べることができないため、作物を細く刻み、浪費しないように飼料をいれて食べさせる道具「オンゴチャ」の利用が拡大したと考えられる。

### 4.3. オンゴチャの利用

#### 4.3.1. 馬のオンゴチャ

以上でオンゴチャの利用と拡大について論じたが、次に家畜ごとのオンゴチャの利用状況について紹介したい。

モンゴル族の遊牧生活は家畜の群れを放牧し、その放牧先を季節的に頻繁に移動する。そして、一日の放牧だけでも何十キロメートル移動するから、その移動に際して騎乗用として馬は欠かせない役割を果たしていたと考えられる。モンゴルの遊牧生活においては、馬を騎乗用とし、牛に車を曳かせて荷物を運び、ラクダは、厳寒期に牛の代わりに車を曳く〔小長谷編 1997:71〕などのそれぞれの役割をはたしていた。しかし、清末民初、蒙地開墾により農耕文化が内モンゴルに入り、モンゴル民族も農業を行うようになった。作物を栽培するモンゴル人たちは、馬と牛を農作業に利用するようになり、馬と牛に鋤を曳かせ、車を曳かせるようになった。しかし、1990年代から馬の役割を機械に置き換えた。人々は移動にはバイクや車を、鋤き曳きや荷物運搬には三輪車、トラクターを利用するようになった。したがって、馬の利用価値が低くなり、馬の数は激減した。

EB村において、馬の越冬の飼料として、干草とトウモロコシの茎を食べさせる。そして、その飼料は機械で細く刻んだものである。そのような、細く刻んだ飼料を与えるためには、必ず飼料をいれる道具としてオンゴチャが必要になる。

ホルチン・モンゴル人は馬の飼育には飼料用のオンゴチャとして吊した木製のオンゴチャと鉄製のオンゴチャを使用する。特に木製のオンゴチャを利用しているケースが多い。馬に水をやるオンゴチャとしては鉄製のオンゴチャやコンクリート製のオンゴチャの利用が多い。

【事例1】 GD氏、48歳、小学校中退の学歴で、子供はおらず、妻との二人家族である。彼は在来種のモンゴル羊ではなく、品種改良をした二頭以上の子を生むハンヤンという羊を110頭ほど飼育している。また、羊放牧用として馬1頭を飼育している。また、133aの土地でトウモロコシを栽培し、46aの土地でサイレージ専用トウモロコシを栽培している。オンゴチャは9個利用している。牛用レンガ・コンクリート製のオンゴチャが2個、羊用格子付きの鉄製オンゴチャが4個、水用鉄製のオンゴチャが2個、豚用オンゴチャが1個あった。2016年6月7日にGD氏は、村から10km離れている放牧地に行くために生活道具を運んでいた。途中でXHS氏に鉄製のオンゴチャの隙間を溶接してもらっていた。そのオンゴチャは馬専用の水をやるオンゴチャであり、放牧地の井戸の脇にあるコンクリート製の長い牛・羊に水を与えるためのオンゴチャの中にいれてダブルで使用するよう設置した。GD氏の話によると、牛・羊の水を飲んでいるオンゴチャの水は腐っているために馬は飲まないし、お腹を痛くすることを防止するため、別なオンゴチャを持ってきた。また、馬のオンゴチャは吊しているのは、馬のお腹は砂に敏感で弱いため、砂が入ることを防いでいるからだ。木製のオンゴチャを使っているのは隙間があり、砂はそこから排除されるからであると説明していた。



【写真 3】 持ち上げたオンゴチャを利用する養馬

【事例 2】 NM 氏、66 歳、小学校卒業、新聞などを読んで漢語を勉強した。妻、息子夫婦と孫からなる 5 人家族である。彼は、メス牛を 9 頭飼育し、メス馬を 3 頭飼育し、トウモロコシを 266 a の土地で栽培し、サイレージ専用のトウモロコシを 133a の土地で栽培している。オンゴチャを 10 個利用しており、その内訳は、馬用の木製 1 個、牛用レンガ・コンクリート製 1 個、牛用鉄製 3 個、木製 2 個、ゴム 2 個、水用鉄製 1 個、豚用コンクリート製 1 個であった。彼の話によると、馬に木製のオンゴチャを使い、柱を立てて吊している理由は、馬には足を叩く癖があるために、それを地面から持ち上げているのだ。鉄製のオンゴチャを使えば怪我をする恐れがあるという。

示した【事例 1、2】から見ると、EB 村の牧畜民たちは馬という家畜の特性や習性により利用するオンゴチャを決めている。彼らは、馬の嗅覚は鋭敏で [三村 1997:173]、汚れた水を飲まないことを把握して羊とは別のオンゴチャを利用し、馬が前肢で地面をかく [三村 1997:183-184] 習性を把握してオンゴチャを選ぶ。また、馬のお腹が砂に敏感で弱いことを把握して、飼料を与える前に細く刻んだ飼料を一回筵で砂を排除し、隙間がある木製のオンゴチャを利用すると馬が餌を取る途中で砂が隙間から落ちること、また飼料の中に砂が入ることを防ぐためにオンゴチャを持ち上げることなどを考慮してオンゴチャを利用しているのだと解釈することができる。

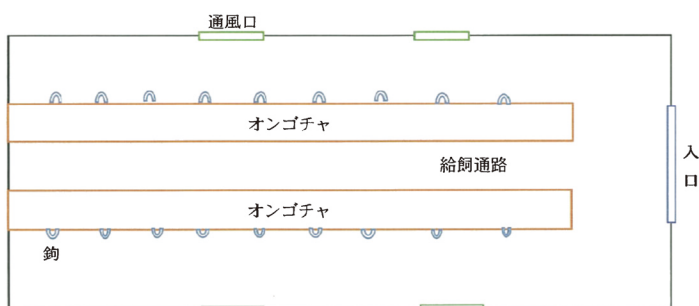
#### 4.3.2. 牛のオンゴチャ

シベリアのサハ牧畜民の牛の飼育は、夏の間は比較的自由に放牧されるが、冬になると自らの牛を畜舎とそこに敷設された囲いから出さなくなる [高倉 2012:214]。サハ牧畜民のように EB 村における牛の飼育方法は放牧と舎飼いを結合する形になっている。

しかし、調査地の牛の飼育については、オスとメスの間に違いがある。【表 2】に示したように、メス牛は放牧禁止時期を除き、放牧が可能である。しかし、牧民たちは冬季に入ると、放牧地に放牧すると腹いっぱい食べられないと考えて午前中に放牧（牧夫なし）し、午後に舎飼いする。

【表 2】 牧畜民の牛飼育の図表 [2014 年の調査により作成]

四季	月	放牧の可否	オスウシの飼育	メスウシの飼育
冬	12	可能	舎飼	舎飼(午前中だけ放牧する人いる)
	1			
	2			
春	3	禁止	舎飼あるいは放牧	舎飼
	4			
	5			
夏	6	可能	舎飼あるいは放牧	放牧
	7			
	8			
秋	9	可能	舎飼あるいは放牧	放牧
	10			
	11			



【図 13】 牛舎の平面図 [調査により作成]

オス牛は通年に渡り放牧せずに舎飼いすることがある。人によっては夏に放牧することがある、よく肥えたオス牛を肉用として売却するため去勢せずに個別に放牧する。

牛を舎飼いすると畜舎の中には牛に飼料を与えるためのオンゴチャが必要になり、【図 13】に示したように、牛舎の真ん中に二列の飼料をいれるレンガ・コンクリート製のオンゴチャが設置されている。そのオンゴチャの端に鉄製の鉤が付けられており、この鉄の鉤は牛を繋ぎ飼うものである。鉤以外には、鋼管を利用してオンゴチャを牛一頭分ごとに【写真 4】のように切り分けていることもある。

EB 村において、牛に飼料を与えるオンゴチャは 335 個あり、その内レンガ・コンクリート製のオンゴチャは 123 個（舎内用 102）、鉄製のオンゴチャは 106 個、タイヤゴム製 89 個、木製のオンゴチャは 15 個あった。

上述したように、ホルチン・モンゴル人の牛飼育では、12－6 月まで舎飼いするのが一般的である。しかし、当該地域においては、5 月から気温が高くなる。5 月、6 月の二か月間は、牛舎



【写真 4】 舎内における切り分けた牛用のオンゴチャ

の中が暑いので牛を舎外の涼しい場所で飼育するようになる。その時期には、舎内に設置したレンガ・コンクリート製のオンゴチャ以外の鉄、木、タイヤゴム製のオンゴチャを利用することが多い。

それでは、ホルチン・モンゴル人は、なぜ牛舎の中でレンガ・コンクリート製のオンゴチャを設置して利用しているのかを事例から分析して見よう。

【事例 3】 NM 氏（【事例 2】と同じ人物）の話によると、牛用オンゴチャの端に鉤を設置して紐で結ぶことや銅管を利用してオンゴチャを牛 1 頭分ごとに切り分けることは牛がお互いの飼料を奪い合って喧嘩することを防止するためのものである。牛も人間のように強いものが弱いものから飼料を奪うと言い、レンガ・コンクリートのオンゴチャの作成技術は漢族から学んだが、銅管などを設置する技術は自分たちで編み出したものだという。

【事例 3】 から見れば、ホルチン・モンゴル人は、牛群の中で、飼料や休憩場所などの資源に対して優先権を持つ個体が存在する〔三村 1997:158〕習性を把握し、牛の飼料の奪い合いを防止するためにオンゴチャに鉤を設置して牛を紐で繋ぎ、銅管でオンゴチャを切り分けるなどの工夫したことが分かる。それ以外にも、牛を一頭ずつに並べて繋いで置くことは牛舎に出きる限り多くの牛をいれるための工夫だと思われる。牛は体が大きく、力が強いために紐をつけるものは頑丈で重いものが求められ、便宜上、水と飼料両用のオンゴチャが必要になるわけである。そのため、レンガ・コンクリート製のオンゴチャが一番理想的だと考えられる。

日本では、牛舎内の飼槽として必要な条件、①牛がらくな姿勢で採食でき、②飼料を外にこぼさない形状と寸法を持ち、③内部は食べ残しや飼料に付着で汚れず④掃除がしやすく⑤頑丈であること。この条件にかなう飼槽として、一般にはコンクリートの固定飼槽が利用されている



[尾崎 1971:77]。ホルチン・モンゴル人の牛舎に利用している飼料を与えるオンゴチャになる飼槽はほぼ上述の条件をみたしている。また、中国においては、伝統的な牛舎は基本的に飼槽、牛床、牧柵などによって構成され、舎内には繋留設備として首枷や首のチェーンなどを利用して管理する[中国農業百科全書(牧畜業巻上) 1996:441]ということもあり、【図 13】に示したような畜舎の構成条件はこうした繋留設備の条件とほぼ共通している。

上述したような舎飼いする時に利用する畜舎と飼槽の諸条件を満たしている畜舎とオンゴチャの利用を見ると、ホルチン・モンゴル人の家畜飼育は、従来の自然の草と水を求めたモンゴル牧畜から作物を飼料にする舎飼いという新たな飼育技術を受け入れるようになっていていると考えられる。

#### 4.3.3. 羊・山羊のオンゴチャ

現在 EB 村の羊・山羊の飼育は、羊と山羊を一つの群れに共同で飼育し、夏に放牧、冬に舎飼いと放牧を結合している。また、越冬時の飼料として、細く刻んだトウモロコシの茎やトウモロコシ実を利用している。また、飼育している羊の品種は在来種の羊ではなく、漢族と同様に品種を改良した生産性の高い羊を飼育するようになっていている。

EB 村において、羊・山羊を畜舎あるいは囲いで飼育する場合には、家畜に飼料やるためにはゴム製、木製などのいろいろなオンゴチャが見られる。EB 村の羊飼育には、87 個のオンゴチャが利用され、鉄製のオンゴチャ 58 個、木製のオンゴチャは 14 個、タイヤゴム製のオンゴチャは 15 個使われている。しかし、メインとして鉄製の上部に格子型の飼料いれを設置した【写真 5】に示したようなオンゴチャを利用している。

ホルチン・モンゴル人は羊の背が低いために、飼料用のオンゴチャを地面に置いて頭が届くようなサイズのオンゴチャを利用する。また、オンゴチャが高くないために羊がオンゴチャに出入



【写真 5】 羊に格子型のオンゴチャを利用して飼料を与える

りすることがあり、このようなことが頻繁にあると飼料が零れてしまう。このような、飼料の浪費を防止するためにホルチン・モンゴル人は羊の背の高さに合わせ、飼料を浪費しないオンゴチャを利用するようになった。そのことを事例と写真を挙げて説明しよう。

【事例 4】 GD 氏（【事例 1】と同じ人物）2014 年当時、GD 氏は在来種のモンゴル羊ではなく、品種改良をした二頭以上の子を生む羊を 40 頭飼育していた。しかし、当時羊の市場価格がよいために、近隣の旗から一頭当たり 600 円で 49 頭の子羊を購入した。2017 年には、羊 40 頭、牛 3 頭、馬 1 匹を飼育していた。2014 年の 2 月に GD 氏の羊の飼育の在り方について調査を行ったところ【写真 5】のような羊に飼料を与えるオンゴチャを利用していた。彼の話によると農機修理屋の AJ さんに作ってもらい、オンゴチャに格子が設置すると羊はオンゴチャに入ることが出来ず、飼料を浪費しない。

【写真 5】の鉄製のオンゴチャは羊専用の飼料を与えるオンゴチャである。このオンゴチャの上部には鉄製の格子型の飼料入れを設置し、ここから羊に食べさせ、格子から落ちた飼料や残した飼料が下部のオンゴチャに入るように作ったものである。また、この格子の設置により羊がオンゴチャに入ることも防止しており、飼料の浪費も防いでいる。

【事例 4】と【写真 5】から見れば、牧畜民は羊・山羊の特徴や習性に基づき、羊の背が低いためにオンゴチャを低くしているが、オンゴチャを低くすると羊・山羊がオンゴチャに出入りして飼料を散らかしてしまい、浪費する。そこで羊には、飼料を浪費しないことを優先に考えて飼料の浪費を防ぐためにオンゴチャの上部に格子型の飼料入れを設置したオンゴチャを利用するようになっていることを明らかにした。

#### 4.3.4. 豚のオンゴチャ

豚は清朝の中葉ごろ蒙地開墾時の漢族入植に伴って入ってきた家畜である。モンゴル地方の定住に伴い人々は養豚するようになり、現在豚は哲里木盟（通遼市）の人々の飼育する家畜の主要な一種である [哲里木盟地方志編纂委員会 1996:69]。

EB 村の人々は、家屋の周りに作物を栽培しているために、豚舎を作って飼育している。豚舎はレンガ・コンクリート製であり、壁から床まですべてレンガ・コンクリートで作っている。豚の飼料は主にトウモロコシであり、トウモロコシの粉と配合飼料をお湯で混ぜて液状にして食べさせている。EB 村では、各世帯にほぼ豚舎が一つあり、その中の養豚用のオンゴチャが使われる。この村の養豚には、レンガ・コンクリート製のオンゴチャは 41 個、石製のオンゴチャは 5 個、鉄製のオンゴチャは 7 個使われている。その中のレンガ・コンクリート製のオンゴチャが中心に利用されている。以下に、養豚用のオンゴチャの利用について事例と写真を提示しながら説明したい。



【事例 5】 XL 氏、50 代の女性、高校卒業の学歴、夫と大学生の娘からなる 3 人家族。彼女はトウモロコシを 200 a の土地で、サイレージ専用トウモロコシを 54 a の土地で栽培している。牛を 12 頭飼育している。オンゴチャを合計 12 個利用し、牛用のレンガ・コンクリート製のオンゴチャは 2 個、牛用の鉄製 4 個、牛用タイヤゴム製のオンゴチャ 3 個、水用のオンゴチャが 1 個、豚用のコンクリート製のオンゴチャは 2 個あった。2016 年の調査で XL 氏の豚舎で【写真 6】のオンゴチャを見学し、豚舎とオンゴチャについて尋ねた。彼女の話によると、豚は鼻でものを掘り起こすという特性があるために、豚舎の壁や床を全部コンクリートで被っている。豚が鼻でものを掘り起こすこと防ぐために、コンクリート製あるいは石製のオンゴチャを利用すると話していた。

牧畜民は豚を飼育する時には、鼻力が強く、物を持ち上げたり、跳ね退けたり、地面を掘って食物を探し当てる習性〔三村 1997:207〕を防ぎ、ひっくり返し難いことや作物飼料も液状であることなどを考えて、重くて水漏れを防ぐことができるコンクリート製あるいは石製のオンゴチャを利用していることを理解できる。

これまでは、家畜の種類別に飼育方法やオンゴチャの利用状況を紹介した。上述のことからホルチン・モンゴル人は禁牧政策により家畜を舍飼いするようになり、人口増加、家畜増加、農耕拡大、砂漠化や放牧地の縮小などの現象により家畜の飼料に作物を利用するように変わったことを読み取れる。以上のことが原因で家畜に飼料を与える道具が拡大されるようになった。そして、牧畜民は定住し、家畜を舍飼いし、作物を飼料として利用するために、家畜の特徴・習性および自分の必要に応じて家畜に飼料を与えるオンゴチャを利用しているのだと解釈することができる。また、ホルチン・モンゴル人のオンゴチャを利用した冬季の牛飼いの状況から、家畜飼育において、新たな技術を受け入れていることがわかる。オンゴチャの利用とその利用法の拡大して



【写真 6】 コンクリート製のオンゴチャを利用する養豚

いることから、ホルチン・モンゴル人がオンゴチャを利用して放牧から舎飼いへと飼育方法を変化させるなかで、家畜飼料として作物の利用もオンゴチャにより実践されており、これはすなわち、農業と牧畜結合の実践でもあると考えられる。

## 5. 多様化するオンゴチャ

### 5.1. 材質、形、利便性

前述したように、梅棹(1990)は、オンゴチャと言うのは木製であり、形的には【図4】に示したような形態や箱型と解釈している。しかし、現在、内モンゴルにおいて、オンゴチャを飼料用にも利用し、作成材質も多様になり、形なども多様化していることがみられる。これについて以下に事例と写真を提示して説明したい。

【事例6】 GS氏、45歳、高校卒業、妻と大学生の息子からなる3人家族。牛を23頭飼育している。200aの土地でのトウモロコシを、200aの土地でのサイレージ専用トウモロコシを栽培している。オンゴチャを合計7個利用し、牛の舎内用のレンガ・コンクリート製のオンゴチャ2個、舎外用のレンガ・コンクリート製のオンゴチャは1個、牛用の鉄製のオンゴチャは3個、水用鉄製のオンゴチャは1個あった。彼の話によれば、牛は餌を取る際には、草の場合は舌で丸めてとり、トウモロコシの粉と配合飼料の場合には舌で舐めてたべるという特徴がある。また、牛を舎飼いしている場合、放牧地に放牧しているように自由に塩分などを摂取出来ないためにコンクリート製のオンゴチャの底部を舐めているとオンゴチャの底部のコンクリートが消耗されて下に埋まっているレンガが出てしまうことがあり、そのために、オンゴチャの底部をセラミックタイルで作るようになっている。

【事例6】から見れば、牧畜民は舎飼いし、作物飼料を牛に与えることにより牛の舌で舐めてオンゴチャの底部を消耗する問題を考え、牛用レンガ・コンクリート製オンゴチャの底部に【写真8】のようにセラミックタイルを利用するように変わっていることが理解できる。もちろん、セラミックタイルで底部を作ることはコストが高い。しかし、耐久性があるので、長い目でみればセラミックタイルの方がより良いのではないかと考えられる。

上述の牛用のオンゴチャ以外には羊用のオンゴチャにも変化が見られる。現在、牧畜民の羊飼育には主に【写真10】のような格子付きの鉄製のオンゴチャ（【写真5】と同じ）を利用している。その格子付きのオンゴチャの利用が始まったのは2010年以降のことである。このオンゴチャを利用する前は通常の地面に置いた【写真9】のような鉄製オンゴチャあるいは、ゴム製、木製の低いオンゴチャ利用していた。現在でも、未だにそれを利用している人もいる。

この羊用のオンゴチャの変化から、家畜が増加する一方で、牧畜民の牧草地が狭くなりつつあること、家畜飼育の飼料が作物に依存する割合が増加したことによって家畜の飼料の有限性と重



【写真 7】 コンクリート製のオンゴチャ



【写真 8】 セラミックタイルをいれたオンゴチャ



【写真 9】 羊の鉄製のオンゴチャ



【写真 10】 格子付き鉄製のオンゴチャ

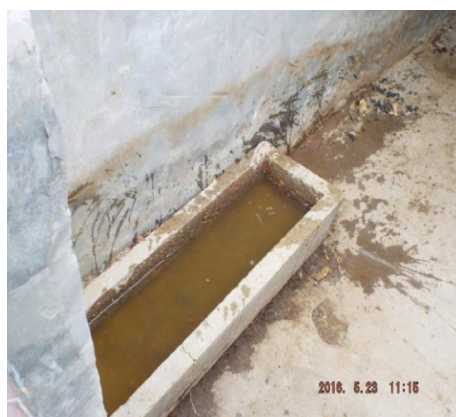
要性に感じられるようになり、飼料を節約することを考えるようになってきていることは明らかである。

また、牧畜民は家畜の飼料を節約するために、羊・山羊には、飼槽での給餌時に、激しい攻撃行動が見られる〔三村 1997:202〕特徴を把握して、オンゴチャの中の飼料を溢さないように、オンゴチャの上部に格子型の飼料入れを設置して作物に頼る飼料を浪費しないようなオンゴチャの利用を心がけている。このように、飼料を節約するのは、家畜飼育の冬季における飼料の確保だけにとどまらず、放牧禁止期間の飼料確保もふくまれている。飼料は不足すると購入することになる。2017年2月の時点では、作物飼料は15kgが13-15円で、羊5頭の一日の量になるので家畜の飼料を購入すると膨大な金額になるわけである。

牛と羊用のオンゴチャの変化以外に、豚のオンゴチャの変化について紹介したい。

豚は、触覚は優れており、鼻で触診して判断し行動する。また、鼻力が強く、物を持ち上げたり、跳ね退けたり、地面を掘って食物を探し当てる習性がある〔三村 1997:207〕ので石製とコ





【写真 11】 豚のオンゴチャ



【写真 12】 飼料入れ付き豚のオンゴチャ

ンクリート製のオンゴチャを利用すると上述した。現在、豚が鼻で触診して判断し、地面を掘って食物を探し当てる習性に対応してコンクリート製のさらに便利なオンゴチャが出現した。それは、【写真 12】のようなオンゴチャである。このオンゴチャの下部はコンクリート製で重く、上部は鉄製の飼料入れである。飼料入れに飼料をいれておけば、コンクリートの部分と鉄の部分の接触点に一つのレバーがあり、豚は鼻でそのレバーを押すと飼料が自動的出てくる。しかし、このオンゴチャはマーケットから購入したもので、隣接する漢族が考案して作ったものだと考えられる。

ここまではオンゴチャの作成材質、形、利便性などの多様化について記述してきた。ここから牧畜民は、作物からなる家畜の飼料の大きさや形、牛の餌を取る習性までに考慮してオンゴチャを変化させていることがわかる。その理由はホルチン・モンゴル人が定住し、家畜の飼育方法が放牧から放牧と舎飼い結合に変わり、作物飼料の割合の増加、家畜の増加、牧草地の減少、砂漠化などの自然・社会環境の変化したことである。牧畜民は家畜を通年牧草地で放牧している場合はこのようなことを気にしなくてかまわないと考えられ、逆に、この地域の牧畜民は上述のことに気にしないと家畜飼育が成り立たないと考えられる。また、人々の採草地が消え、牧草地が縮小したため、作物に頼る飼料の有限性にも関心を払っていることも読み取れる。そして、モンゴル牧畜民は定住して農業に従事するようになった現在、豚を飼育するようになったため豚の特性などにも関心を払うようになり、作物飼料を節約している。こうした状況を見ると牧畜民にとって豚も馴染のある家畜になっていることも理解できる。

## 5.2. 注文、要望、購入

これまではオンゴチャの利用やオンゴチャの多様化について紹介してきた。ここでは、人々は如何に要望を出してオンゴチャを注文しているかについて明らかにしたい。上述のように、EB村はソム所在地から 1 km ほど離れている。ソム所在地には、非専門的な溶接屋（注 6）が一つ



【写真 13】 BW 氏の作成した鉄製のオンゴチャ

と農機修理屋が三つある。農機修理屋は主に農機修理に従事し、溶接機を持っているために溶接の仕事もやるようになっている。

まず、写真と事例を挙げながら非専門的な溶接屋と農機修理屋が牧畜民の注文により鉄製のオンゴチャを作成することについて紹介したい。

【事例 7】 BW 氏 EB 村出身、38 歳、中学校卒業の学歴、妻と小学生の息子と 3 人家族。牛 21 頭飼育、トウモロコシを 80 a の土地で、サイレージ専用トウモロコシを 330 a の土地で栽培している。牛用としてレンガ・コンクリート製のオンゴチャを 4 個、鉄製のオンゴチャを 8 個、水用鉄製のオンゴチャ 2 個、豚用 2 個、合計 16 個あった。彼は牧畜と農業をやりながら非専門的な溶接屋をやっている。その溶接の技術は自習したものであり、鉄で扉、窓、オンゴチャなど作っている。家畜用のオンゴチャは主にガソリン用の鉄のタンクで作り、サイズや型および足などはお客の要望によるもので、作成する際に、オンゴチャの周りを【写真 13】のように家畜がケガしないように工夫して頑丈なものを作る。一つのタンクを使ったオンゴチャは 200 元（3000 円くらい）で売却する。また、1 年に作成するオンゴチャの数は 100 にも満たない状況と言う。

【事例 8】 XHS 氏、（【事例 1】に出た人物）34 歳、小学校の学歴、小学生二人の子供と妻からなる 4 人家族である。彼はソム所在地で農機修理屋をはじめて 10 年くらいになっている。彼は主にディーゼルの農機の修理をやっている。その他、溶接の機械があるために鉄製品の溶接の仕事もする。彼の話によると、客の希望によりオンゴチャなどを作る。【写真 14】は XHS が馬に水やるオンゴチャの隙間を溶接しているところである。



【写真 14】 オンゴチャの溶接



【写真 15】 オンゴチャの設置



【写真 16】 溶接をする AJ 氏



【写真 17】 AJ 氏の作品

【写真 15】は、XHS 氏の作ったオンゴチャを井戸に設置しているところである。このオンゴチャを注文したのは羊を交替番で放牧する 4 世帯の人々であり、彼らは放牧地で家畜に水をやるオンゴチャが必要になった。その群れの規模は 200 頭くらい、運び易いことなどを考えて XHS 氏に頼んでガソリンの鉄タンクをカットして二つに分けて、また溶接により繋ぎ、そして、溶接により足などを取り付けたオンゴチャを作ってもらった。

【事例 9】 AJ 氏、34 歳、中学校卒業の学歴、妻と二人の息子の 4 人家族である。ソム所在地に農機修理をやって 5 年くらいになっている。彼は主に農機と重機修理の仕事に従事する。それ以外にも溶接の仕事もしている。彼の話によると、お客さんの要望があれば、なんでも作れる。客の方が材料や大きさ、需要性などを決める。【写真 17】のオンゴチャは彼の作ったオンゴチャである。筆者にオンゴチャの模型を作って上げると言っていた。

ここでは、鉄製のオンゴチャの注文による作成について紹介した。次には、豚に飼料を与える





【写真 18】 豚舎を建てる HS 氏の土木職人グループ

レンガ・コンクリート製のオンゴチャの注文、作成について事例と写真を提示して説明する。

【事例 10】 HS 氏、40 代、学歴不詳、妻と軍人の息子の 3 人家族である。彼は蒙漢雑居する村から EB 村の隣村に移住してきたモンゴル族である。彼は土木職人として一つのグループを組織して、夏季には畜舎などを建てる仕事も従事している。そのグループは 3 人の職人と 2 人の技術を持たない手伝う人の 5 人で構成されている。工賃は技術をもっている職人は一日 200-250 元 (3500-4000 円くらい)、技術を持たない人は 100-150 元 (2000-2500 円くらい) である。お客さんとのやり取りにより決めている。しかし、この人々は豚舎や家畜用のレンガ・コンクリート製のオンゴチャ、庭まわりの<sup>へい</sup>塀などの作業はできるが、大型の牛舎の建築などでは信頼されないようである。

以上のオンゴチャの注文と作成状況からは、ホルチン・モンゴル人はオンゴチャなどが必要な場合には自分の必要に応じて、場所やサイズ、材質などを自分の作りたい理想的な形を職人たちに要望して注文し、作成してもらっていることを明らかにした。

EB 村の牧畜民たちはオンゴチャや畜舎を建てる時は他の土木職人も使うし、漢族職人も一般的に使われる。したがって、牧畜民の自分の必要に応じて作った自家製のオンゴチャについて写真を提示して紹介したい。

【写真 19】 は、自家製の小型のオンゴチャである。このオンゴチャはタイヤをカットし、木板に釘で固定して平にしたものである。このオンゴチャは小規模の群れである羊・山羊に水をやるために作ったものである。また、このオンゴチャは羊・山羊に飼料を与えるオンゴチャとして利用しても構わない。

【写真 20】 は、壊れた家畜に水をやるオンゴチャである。このオンゴチャは EB 村の共同放牧



【写真 19】 自家製のゴムのオンゴチャ



【写真 20】 自家製のコンクリートオンゴチャ



【写真 21】 自家製の羊用の木製のオンゴチャ

地の井戸に設置していた村のあらゆる家畜に水をやるために作ったものである。オンゴチャ作成には有刺鉄線網用のコンクリートの柱を並べて、中身をセメントで被った自家製のものである。土木の職人の作ったオンゴチャのように頑丈ではなく、壊れやすいものであった。

【事例 11】 HB 氏、55 歳、中学校卒業の学歴、子供が独立し、夫婦 2 人の家族。トウモロコシを 373 a の土地で栽培している。2016 年に 70 頭の羊を売却し現在 14 頭を飼育し、牛を飼育しようとしている。彼は牛用のレンガ・コンクリート製のオンゴチャは 2 個、羊の木製オンゴチャを 5 個、水用鉄のオンゴチャ 1 個を利用している。彼の話によると、【写真 17】のような格子付きの鉄製のオンゴチャは羊が格子に頭を挟まれて死亡する恐れがあるので使わない。それより理想的なのは、【写真 21】の様な木製のオンゴチャであり、上に横バーがあれば羊も入れないし、安全性も高い。また、自分で作ると金も掛からない。





【写真 22】 マーケットから購入したオンゴチャ

上述の自家製のオンゴチャの作成から牧畜民は、オンゴチャ作成のコストも考えており、コストを節約するためには、自分の作成技術を考えて身回りの入手可能な材質を選び、需要に応じて作成していることが分かる。

最後に、牧畜民が利用しているマーケットから購入したオンゴチャなどについて写真を提示しながら紹介したい。

【写真 22】は、羊と牛兼用のオンゴチャである。このオンゴチャは車のタイヤをカットして作ったオンゴチャである。このようなタイヤゴム製のオンゴチャは、鎮(ソム)レベルのところで定期的に開かれる農民貿易市場というマーケットから購入するものである。また、金物商店からの購入も可能である。牧畜民はオンゴチャをマーケットから 20-25 元(400 円くらい)で購入している。もちろん、タイヤゴム製のオンゴチャ以外にも漢族職人が作った他の材質の様々なオンゴチャがマーケットで販売されている。牧畜民は自分の用途に応じて、サイズ、種類、コストなどを決めて購入する。

以上のオンゴチャの注文および購入の事例と写真から、人々は、自分の家畜の習性、家畜の規模などによってオンゴチャのサイズ、種類などを決めて自分なりの要望で注文したオンゴチャを利用していることがわかる。また、ホルチン・モンゴル人におけるオンゴチャ作成の基本技術は自分たちで発明したものではないとおもわれる。しかし、牧畜民の要望によりオンゴチャを変化させ、多様化されていることがわかる。そして、ホルチン・モンゴル人の家畜飼育方法は、地域の人口や家畜増加、農耕地拡大により砂漠化や牧草地の減少が生じることなどを原因として放牧から放牧と舎飼い結合に変わったことも確認できる。本稿では、牧草地の減少、砂漠化、農耕化が進んだホルチン地域では家畜の飼料が作物に依存するようになり、そのために様々なかたちのオンゴチャが必要になっていることを明らかにした。

## 6. おわりに

以上、内モンゴル・ホルチン左翼後旗 EB 村を事例に、モンゴル人の家畜飼育の道具であるオンゴチャの利用現状を記述し、オンゴチャの多様化および注文、作成、購入などについて検討してきた。

これまでに検討してきたことを考察すれば、まず、内モンゴル・ホルチン左翼後旗のモンゴル人たちは、清末民初から定住し、遊牧から農牧へと生業が転換した。そして、中華人民共和国の成立以来、激しい社会・自然環境の変化を経験しながら、農作物に依存して牧畜を維持していることを示した。次に、梅棹（1990）の研究におけるオンゴチャの紹介について記述し、そのオンゴチャの現代における多様化と私有化について記述した。さらに、古代中国の家畜飼育における飼料用のオンゴチャの利用を提示し、そのオンゴチャを利用する家畜飼育技術が漢族の入植と内モンゴルの農耕化により伝わったこと、およびホルチン地域における人口、家畜、農耕地などの増加や砂漠化、牧草地の減少、作物飼料の割合の増加などによりオンゴチャの利用が拡大した諸要因を明らかにした。そして、人々の家畜飼育におけるオンゴチャの利用状況を例示し、牧畜民が家畜飼育のあり方を変化させて放牧と舎飼いを結合するなかで、作物飼料に頼る舎飼いにより家畜の特徴・習性に関心を払いつつ、自分の必要と家畜の習性に応じて家畜に飼料を与えるオンゴチャを利用していることを解明した。ホルチンの牧畜民が定住して農業に従事することとともに、豚を飼育するようになり、現在、豚の特性などにも関心を払うようになり、利便性と節約性を考えてオンゴチャを利用していることを明らかにした。それから、牧畜民は作物で作った家畜の飼料の大きさや形と、牛の餌を取る習性にあわせてオンゴチャを変化させていることから、牧畜民の採草地の消失、牧草地の縮小や作物に頼る飼料の有限性、ならびに放牧と舎飼いの結合した家畜飼育をしていることを解明した。最後に、作物飼料に依存する舎飼いという家畜飼育方法の導入は、様々な形のオンゴチャを必要とし、人々は自分の要望によりオンゴチャを注文し、作成していることを明らかにした。

ここまでで明らかにしたことを総括してみよう。牧畜民の家畜飼育における道具にあたるオンゴチャの事例から、ホルチン・モンゴル人の家畜飼育は、家畜の飼料として作物に依存するようになり、放牧と舎飼いを結合したことを確認できる。また飼料用のオンゴチャは人口、家畜、農耕地増加や砂漠化、牧草地の減少などが生じた環境に生きるモンゴル人の農牧複合生業における生産物であると論じることが出来る。ここから、ホルチン・モンゴル人がいかに農業を利用して牧畜を維持しているのかという問いに答えることは出来ると思われる。

また、梅棹氏（1990）は、1944 年 9 月から 1945 年 2 月までの内モンゴルにおける牧畜調査を主にチャハル（注 7）地域で行った。当時、チャハルとホルチンとは、定着化では共通しており、農耕化においては対照的であった。しかし、1990 年代後半になると内モンゴル全体で家畜飼育頭数や農耕地面積の増加が続く中で、砂漠化の進行は加速し、2002 年に「退耕還林・退牧還草」の政策が実施された〔淡野 2011:53〕。これらの政策は、内モンゴルの牧畜業の飼育方法に放牧

禁止や舍飼いなどの大きな変化をもたらした。現在、牧畜地域であるシリングル盟の牧畜業の飼料も外部依存になっている(阿拉坦、千年 2012:134)。ここで言う外部飼料とは近隣の漢族農民から購入する作物飼料を指しており、ホルチンとチャハルは家畜飼育に作物飼料を利用する点で共通していると言える。そして、現在内モンゴルの広い範囲で家畜飼育にオンゴチャを利用することも一般的になっている。オンゴチャの利用拡大や多様化現象は、農業に依存するようになった変化を内モンゴル全体の家畜飼育技術の変化として捉えることが出来る。

その上、オンゴチャの利用拡大と多様化、私有化は牧畜民の農業と牧畜を共にする生業の日常生活における実践である。人々は、生業において経済的な収入を向上させるために家畜飼育と農耕を共にする戦略を取っている。生業の特徴としてここでの牧畜は農業に依存していることを指摘できる。この点で、社会主義化を経ち、市場経済化に直面している牧畜民の農牧複合生業は如何に自然・社会環境の変化に対応して実践されているかが明らかになった。

本稿では、家畜飼育道具―「オンゴチャ」を通して、内モンゴル・ホルチン地域のモンゴル人が、農業という植物を通じて環境に働きかけて食糧を確保する生業を利用し、人間の食料を生産するだけに留まらず、家畜の飼料を確保することにより家畜の飼育を維持し、生活の基盤を確保し、現代中国の社会で生存していることと、牧畜民の家畜飼育方法と家畜飼育用の道具が常に変化していることを明らかにした。これは内モンゴル・ホルチン地域の家畜飼育における物質文化の変容と生業変容にかかわる問題にとどまらず、モンゴル全体の現代における生業文化問題を改めて認識することに欠かせない研究上の意義があると考えられる。

なお、本稿では、ホルチン・モンゴル人の農牧複合生業における農業の牧畜業に依存する関係については解明することをできなかった。今後の課題としたい。

## 謝辞

本論文は、「富士ゼロックス株式会社小林基金」2016年度在日外国人留学生研究助成と「一般財団法人 東北開発記念財団」平成28年度海外派遣援助の研究助成を受けて行われた現地調査に基づく研究成果である。指導教官の高倉教授と人類学ゼミの先生の方々とゼミの皆様の御協力に賜物にほかならない。みなさまの御支援・御協力に感謝したい。

## 注

- (1) ホルチンとは本来一部族をさしてきた言葉であるが、中国では徐々にホルチン部族が生活する地域を「ホルチン地区」と呼ぶようになった。特に中華人民共和国の成立後は現在の通遼市を中心に、その両側に位置する赤峰市とヒンガン盟をまとめて指すようになった(ボルジギン・ブレンサイン 2003:3-4)。
- (2) 内モンゴルにおいては、現在行政組織として上から自治区、市(盟)、旗(県)、ソム(鎮)、行政村(ガチャー)、小組などのレベルがあり、EB村は一番下の小組に当たる。
- (3) 古代中国の紀元前770年から紀元前221までの時代である。
- (4) 古代中国の960年から1277年までの王朝である。
- (5) 中国北方の広大な農区とは北西部黄土高原などを指す(中国農業遺産研究室 1986:229)。
- (6) 非専門的な溶接屋というのは、BW氏はメインとして農牧業に従事しているが、溶接の機械を持っているため

に注文する人いれば溶接をやるという形で経営していることを指す。

- (7) 従来、モンゴル部族名のチャハルに由来する。現在、内モンゴル自治区のシリントグ盟とウランチャ市の一部の地域を指す。

## 引用文献

### 日本語の文献

阿拉坦砂、千年 篇

- 2012 「内モンゴルの牧畜業の持続的発展方向に関する検討」『北東アジア研究』23:129-149。

小沢重男 編著

- 1994 『現代モンゴル語辞典(改定増補版)』大学書林。

尾崎繁

- 1971 『牛舎と付属施設』文明書房。

梅棹忠夫

- 1990 『梅棹忠夫著者集 2 モンゴル研究』中央公論社。

児玉香奈子

- 2012 『「脱社会主義政策」と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代の変容—オールドス地域農耕民とゴビ地域遊牧民の事例—』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 1 アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究会。

小長谷有紀

- 1992 『モンゴル万華鏡—草原の生活文化』角川選書・角川書店。  
1997 「いざない」小長谷有紀編『アジア読本—モンゴル』7-10 頁、河出書房新社。  
2001a 「定住化過程におけるモンゴル族の牧畜経営」佐々木信彰(編)『現代中国の民族と経済』185-207 頁、世界思想社。

新村出編

- 1982 『広辞苑』岩波書店。

高倉浩樹

- 2012 『極北の牧畜民サハ—進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』昭和堂。

淡野明彦、淡野寧彦

- 2011 「中国内モンゴル自治区における「退牧還草」政策による牧畜(遊牧)業の変化に関する考察」『奈良教育大学紀要』60:42-62。

千田英二 訳 謝成俠 著

- 1977 『中国養馬史』日本中央競馬会弘済堂。

福井勝義

- 1987 「牧畜社会へのアプローチと課題」福井勝義・谷泰編『牧畜文化の原像—生態・社会・歴史—』日本放送出版協会。

ボルジギン・ブレンサイン

- 2003 『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』風間書房。

三村耕

- 1997 『家畜行動学(改訂版)』養賢堂。

### 中国語の文献

郝亜明・包智明

- 2010 『体制政策与蒙古乡村社会变迁』中央民族大学出版社。

黄健英

- 2009 『北方农牧交错带变迁—对蒙古族经济文化类型的影响』中央民族大学出版社

科爾沁左翼後旗誌編纂委員会

- 1993 『科爾沁左翼後旗誌』内蒙古人民出版社。  
2008 『科爾沁左翼後旗誌 1989~2007』内蒙古文化出版社。

繆启愉 訳注 王禎 著

1994 『東魯王氏農書訳注』上海古籍出版社。

内蒙古自治区地図集編輯委員

1999 『内蒙古自治区地図集』内蒙古自治区測繪局。

色音(サイン)

1998 『内蒙古遊牧社会変遷』内蒙古人民出版社。

哲里木盟地方誌編纂委員会

1996 『哲里木盟誌(評審稿)』「第二分冊：農業・牧業・林業・水利」哲里木盟地方誌編纂委員会办公室。

中国農業遺産研究室

1986 『北方旱地農業』中国農業科技出版社

モンゴル語文献

内蒙古大学蒙古語研究院編

1999 『蒙漢詞典(増訂本)』内蒙古大学出版社。

内モンゴル言語文学歴史研究所

1988 『二十八卷本辞書』内蒙古人民出版社。

R・ツェベル

1966 『簡易モンゴル語辞典』モンゴル国出版事務局。